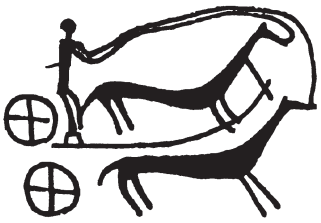
No. 67　*October* 2006

センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education
北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter　No. 67



ゼロから学ぶ「基礎生物学」（6ページ
客員教授に清華大学史教授が着任（12ページ）
平成１８年度全学インターンシップ実績（18ページ）

（詳しい目次は裏表紙にあります）

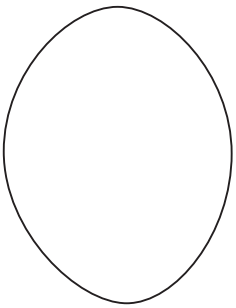
巻頭言　FOREWORD

H.19年度以降のGPA・上限設定，FD等の改善策

文学研究科　教授　安藤　厚

前号の小野寺教授の記事にもあるとおり，平成18年度からの新教育課程と「単位の実質化」の取組みにより学生の履修動向に大きな変化が起こりました。コアカリキュラム(教養科目)の選択科目で履修者が半減した半面，附属図書館北分館入館者が増加し，理系基礎科目を中心に学生の自習時間が増加し，試験の成績・レポートの質が向上し，CALLオンライン授業でも大多数の学生が着実に課題を完了し，1年次1学期のGPAの全学平均値の上昇(2.23→2.35)等，学生の学修状況の改善が見られます(前号5～6ページ，本号3ページ参照)。

教育改革室では，①それらについて総括するとともに，②認証評価，国立大学法人評価(中期計画)への対応や，③大学院設置基準の改正点も考慮して，「平成19年度以降のGPA・上限設定・成績評価，カリキュラム，FD等の改善策について(中間報告)」をまとめ，全学的検討をお願いしています。
http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/gpajyogen.htm



各学部・研究科等に検討をお願いした主な事項

(1) 専門科目の成績分布の公表及び成績評価基準(ガイドライン)の整備
(2) 学士課程2年次以上の履修登録上限設定・早期卒業について順次成案を得ること
(3) GPAを利用した修学指導(1年次2学期及び2

年次１学期）の充実。そのために，すべての学部でクラス担任を正・副２名とすること。

(4) 各学部で進級状況・学位取得状況を継続的に点検・評価する体制の整備

(5) すべての大学院研究科等で「秀」評価を導入

(6) 大学院での成績評価基準（ガイドライン）の整備

(7)「外国語演習」を大学院学生が正規の授業科目として履修できる仕組みを作ること。

(8) 各部局で専門教育に係わる教員研修(FD)と専門教育のTA研修の充実，「TAの単位化」の推進そのほか，大学院設置基準の改正により，研究科又は専攻ごとに，人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定めること。

(9) 大学院でも「単位の計算基準」（１単位の授業科目は45時間の学修が必要）を規程に盛り込むことが必要になっています。

教育改革室，全学教務委員会，全学教育委員会，センター研究部等の主な検討事項

(1) 総合科目，一般教育演習は全学の協力によって実施されるコアカリキュラムの代表的な科目であり，１年次に履修を推奨することを確認し，特に特別講義，一般教育演習についてGPA・上限設定制度の上で適切な履修促進策をとること。

(2) 国際交流科目，教職科目についても，成績分布の公表，成績評価基準（ガイドライン）の設定を推進

(3) パス・ノンパス科目，学生の申請によるパス・ノンパス制度について検討

(4) 学期末試験に近い時期に「履修取消し」を認める制度の検討

(5) １学期の成績優秀者に対する２学期における特例措置，２学期に上限設定の枠外で「再履修」４単位の履修を認める暫定措置の利用状況の検証

(6) 附属図書館入館者数，授業アンケートによる「自習時間」の調査,「学生の声」への投書,独自の教員・学生アンケート等により授業の実質化・自主的な学習の促進の状況を点検し，改善策を検討

(7) 進級状況・学位取得状況を示すデータの整備

(8) TOEFL-ITP試験受験料に対する補助の検討

(9) 全学共通で行う新任教員研修合宿（春秋２回）と全学教育のTA研修の充実。各部局でのFD研修担当者の養成への支援

(10) FDとしての授業参観の組織化と教員の授業研究の具体化

そのほか，以下の検討が進められています。

(11) 全学教育実施体制の運用の在り方の検討

(12) クラス担任マニュアルの見直し

(13) 教員の「倫理綱領」についての研究

検討項目は多岐にわたりますが，新教育課程と「単位の実質化」の実を上げ教育効果を高めるためにも，また，本年３月の大学院設置基準の改正，20年度に予定される認証評価，21年度が最終年度となる中期計画の実績評価に適切に対応するためにも，きわめて重要な事項ですので，各学部・研究科等において早急な検討と着実な具体化をお願いします。

関連して，以下のような催しを行いました。

進化するコアカリキュラム・フォーラム

３月17日に５つの取組合同の「特色GP・現代GP取組活動フォーラム/パネル展」を開催しました。また，本年度はオープンユニバーシティ2006にあわせて７月30日に「進化するコアカリキュラム・フォーラム」を開催し，高校生を中心に約150人が参加しました。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/news/news-top/coe-etc/gp.htm

GPA・上限設定制度に関する講演会

９月29日には横浜国立大学大学院工学研究院田中裕久教授（全学教務委員会委員長）をお招きして「GPA・上限設定制度に関する講演会」を催し，各学部の教務委員，担当職員ら約50人が参加しました。

横浜国立大学では，平成15年度からGPA制度を導入し，卒業基準にもGPAを利用して，最初の卒業生が来春卒業します。講演会では，制度の運用，学生の動向等について，生のデータを交えて興味深いお話が伺えました。

学士課程，大学院課程を通じた「単位の実質化」

「単位の実質化」の推進(GPA・上限設定・成績評価制度の整備，理系基礎科目・外国語科目等の授業改善，FD・TA研修の充実，学士課程・大学院課程を通じた単位制度改革等）には，本センター，教育改

革室，全学教務委員会，各学部・研究科等の緊密な連携が不可欠です。全学の教職員の皆さまのご理解とご協力をお願いします。

（高等教育開発研究部長，教育改革室役員補佐）

全学教育　GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告（第 64 回，65 回）

第 64 回 (平成 18 年度第 2 回)

6 月 28 日 (水) に第 64 回全学教育委員会が開催され，つぎのような議題について話し合いました。

議題 1．平成 18 年度第 1 学期履修調整及び履修者数
議題 2．初習外国語としての「朝鮮語」「スペイン語」の取扱い (案)
議題 3．英語単位「優秀認定」申請 (前期・後期) 要領 (案)
議題 4．英語Ⅲ履修クラス抽選の実施要領 (案)
議題 5．「北海道大学における今後の外国語教育の在り方について (最終報告)」への対応
報告事項 1．平成 17 年度第 2 学期の成績評価の結果

新教育課程と「単位の実施化」による大変化

議題 1 では，18 年度 1 学期の履修調整結果及び履修者数が報告されました。

新教育課程導入と「単位の実質化」の結果，履修者数が 17 年度に較べて全学教育科目全体で 1/4 程度減少し，選択科目ではほぼ半減するなど大きな変化があり，今後，小委員会で学生の履修動向を分析し，2 学期以降の対応策を検討することになりました。

・一般教育演習では, 4 月の履修調整で 84 科目 1,067 人 (17 年度：96 科目 1,965 人の 46％減)，6 月の調整でフィールド型 11 科目 247 人 (同：11 科目 225 人) が決定。定員充足が 25 科目，履修者 3 人以下が 10 科目，空き定員は 686 人 (同：79 人)。
・初習外国語 (独，仏，露，中) 演習では，1 年次生の応募は 182 人，うち抽選による不許可 4 人。その他の外国語演習では，1 年次生の応募は 51 人。
・大講堂での授業 8 科目で履修調整を行ったが，定員超過の科目はなかった。
・論文指導 (主題別科目，一般教育演習) では，6 1 科目 927 人 (17 年度:49 科目 1,174 人の 21％減)。主題別科目 1 科目で履修者が 51 人となったが，担当教員による履修調整がおおむね定着してきた。
・一般の講義科目では，履修登録者多数で抽選が必要な科目はなかった。
・論文指導でない主題別科目 (集中講義を含む) は，67 科目 5,251 人 (17 年度：93 科目 10,892 人の 52％減)。1 クラスの平均履修者数は，思索と言語 64.5 人，歴史の視座 60.1 人，芸術と文学 60.7 人，社会の認識 105.6 人，科学・技術の世界 72.4 人，5 科目平均 78.4 人 (同：117.1 人)。
・総合科目は，40 科目 2,429 人 (17 年度：37 科目 6,850 人の 64％減)，1 クラス平均 60.7 人 (同：185.1 人)。特別講義「北海道大学の人と学問」(部局編)(履修者 39 人，17 年度：411 人)，同 (COE 編)(22 人，同：173 人)，「キャリアデザイン」(28 人，同：120 人) で大幅に減少した。
・共通科目 (体育学, 情報学, 統計学) は, 89 科目 5,656 人 (17 年度：86 科目 6,356 人の 11％減)。新設の体育学 B (講義) の履修者は 32 人。
・外国語科目は 339 科目 12,471 人 (17 年度：357 科目 13,287 人の 6％減)，1 クラス平均 36.8 人 (同: 37.2 人)。
・外国語演習は 95 科目 988 人 (うち英語演習 326 人)(17 年度:66 科目 890 人 (うち英語演習 290 人) の 11％増)，1 クラス平均 10.4 人 (同：13.5 人)。
・数学は 77 科目 4,578 人 (17 年度：84 科目 5,375 人の 15％減)，1 クラス平均 59.5 人 (同:64.0 人)。
・理科 (物理学, 化学, 生物学, 地学) は 128 科目 7,628

人 (17 年度：123 科目 8,422 人の 9％減)，1 クラス平均 59.6 人 (同：68.5 人)。

・自然科学実験は 29 科目 1,350 人 (17 年度：22 科目 1,583 人の 15％減。1 単位科目 (旧基礎実験) が 2 単位科目になったため減少。実人数では 13％増)。各学部の推奨する実験カテゴリーの要望にはすべて応えることができた。文系向けの基礎自然科学実験の履修者は，17 年度の 2 人から 18 人に増加。

(上限設定制度・学修状況の検証)

・予備科目の登録は 697 人 (全登録者の 26.8％)，1,040 科目 (1 人当り 1.49 科目)。登録の入れ替えを行った者は 82 人 (予備科目登録者の 11.7％)。

・18 年度入学者の履修登録単位数は平均 22.1 単位 (17 年度 1 学期は平均 28.2 単位)，上限まで登録した者は 78.2％。

・附属図書館北分館で 1 年次生の入館者が 4 月は 12,661 人 (17 年度：7,864 人の 61.0％増)。5 月 18,346 人 (7.3％増)，6 月 19,764 人 (4.2％増)，7 月 25,238 人 (3.3％減)，8 月 6,848 人 (31.7％減)。

「韓国語」「スペイン語」を開講

議題 2 では，19 年度より新たに「朝鮮語」「スペイン語」を外国語科目 (第 2 外国語) に加えるのに伴い，「初習外国語としての「朝鮮語 (韓国語)」「スペイン語」の取扱い (案)，募集要項への記載事項等が了承されました。

英語単位「優秀認定」の実施要領

議題 3 では，TOEFL，TOEIC，英検等の成果に基づく英語単位「優秀認定」の申請要領，実施日程が了承されました。

議題 4 では，英語 II の TOEFL-ITP 試験の結果に基づく能力別・技能別英語 III 履修クラスの抽選の実施要領が了承されました。

第 65 回 (平成 18 年度第 3 回)

8 月 8 日 (火) に第 65 回全学教育委員会が開催され，つぎのような議題について話し合いました。

議題 1．平成 19 年度全学教育科目の開講計画

議題 2．平成 18 年度第 2 学期開講の特別講義「大学と社会」の取扱い

議題 3．平成 18 年度第 2 学期の履修調整

議題 4．非常勤講師の任用

議題 5．補講期間及び定期試験期間を廃止することの検討

議題 6．「北海道大学における今後の外国語教育の在り方について (最終報告)」への対応

議題 7．科目責任者の役割 (全学教育科目)

議題 8．平成 18 年度 1 学期の履修状況についての総括と今後の対応方針

報告事項 1．平成 17 年度第 2 学期の成績評価結果及び平成 18 年度第 1 学期の成績評価の依頼

報告事項 2．「高大連携科目に関する研究会」による高校生の授業聴講

報告事項 3．英語単位「優秀認定」制度の申請者数

19 年度開講計画

議題 1 では，19 年度全学教育科目の開講計画について，依頼内容及び教育課程改編に伴う 18 年度との変更点等が説明され，以下を確認して，開講依頼を行うことが了承されました。

・19 年度開講計画作成及びシラバス入力の日程：19 年度からシラバスの入力システムが変更になる。11 月下旬に開講科目のデータをシステムに取り入れ，12 月初旬から教員による入力を開始。

・主題別科目，論文指導講義，文系基礎科目，外国語演習 (責任部局枠 / 一般教育演習枠) 等について，責任部局の開講数のガイドラインを作成した。

・外国語演習の様式に，責任部局枠 (主題別科目) と一般教育演習枠に分けて「コマ数の算定を希望する科目名」の記入欄を設けた。責任部局枠では，言語文化部が開講する外国語演習は外国語科目に準じて講義換算 5/8 コマと計算し，言語文化部以外の部局が開講する外国語演習は主題別科目に準じて 1 コマと計算する。

・総合科目，一般教育演習，外国語演習については，「部局別開講一覧」に記した依頼数 (総合科目：各部局 1 コマ以上，一般教育演習：教員 10 人につき 1 コマ以上，外国語演習：うち 20％程度を目標値とする) と開講実績に沿って，18 年度実績を下回

らないように依頼する。

・外国語演習は，企画責任部局（文，教，法，経）には主題別科目の従来の開講数のうち20％程度，担当責任部局（理，工）には同10％程度を目標値として依頼する。

・総合科目，一般教育演習についても開講時間の第一希望／第二希望を必ず書いていただき，2学期の開講科目数を多くするよう調整する。

・各部局の授業担当状況表に基づき19年度の開講責任コマ数を計算する。20年度以降の負担については，教育改革室の全学教育実施体制運用の在り方検討WGで今後検討する。

「大学と社会」の履修促進策

議題2では，2学期開講の特別講義「大学と社会」について，1学期の特別講義の履修者が大幅に減少したが，「大学と社会」は社会で活躍する卒業生等を講師に招いて行うコアカリキュラムを代表する科目であり，より多くの学生に履修を促すため，①履修登録上限設定に含めない，②履修登録前の抽選による履修調整の対象としない，③履修登録後に登録者が多すぎた場合は抽選により500名までに調整する，④GPA，進級・卒業要件に算入することが了承されました。

2学期の履修調整

議題3では，2学期も1学期とほぼ同様に，①英語演習，②初習外国語演習，③一般教育演習，④その他の外国語演習，⑤大講堂での授業の順に抽選で履修調整を行うことが了承されました。

・一般教育演習については，抽選の上限を履修希望者数に応じて20～25名で機動的に調整する。

・英語演習，初習外国語演習，その他の外国語演習については，今回から教務課で抽選の作業を行い，抽選の上限を履修希望者数に応じて20～30名で機動的に調整する。

議題4では，非常勤講師について，19年度の削減目標の確実な実現を図ることが了承されました。

補講期間及び定期試験期間を廃止

議題5では，「単位の実質化」の一環として，19年度から現行の補講期間及び定期試験期間(2週間)を廃止し，替わりに補講及び定期試験を含めて16週の授業期間を設定し，その中で各教員が計画を立て「15週の授業」を確保することが提案され，今後各部局，小委員会で検討し，12月の全学教育委員会で結論を得ることが了承されまする。

「今後の外国語教育の在り方（最終報告）」への対応

議題6では，5月17日の全学教務委員会で了承された「北海道大学における今後の外国語教育の在り方について（最終報告）」への具体的な対応策として，以下が了承されました。

①「朝鮮語（韓国語）」について，外国語科目，外国語演習の授業科目名は，センター試験の科目名に合わせて「韓国語」とする，ただし講義題目名等では「朝鮮語」「ハングル」等の使用は妨げない。

② スペイン語演習，韓国語演習以外の「第3外国語」演習は外国語特別演習にまとめる。

③ 思索と言語「西洋古典語（ギリシア語，ラテン語）」についても外国語特別演習に移すよう要請する。

④ 言語文化部以外の部局が1年次1学期に開講する英語演習については「中級」も認め，受講に必要な学力レベルは各科目のシラバスに記載する。

http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/gaikokugo2/gaihou17lineoff.pdf

科目責任者の役割・業務

議題7では，全学教育科目責任者の役割・業務を整理した文書が了承され，各科目責任者に送付することになりました。

議題8では，18年度1学期の履修状況についての総括と今後の対応方針が了承され，これに沿って2学期の履修調整を行うことになりました。また，一般教育演習，外国語演習の履修調整（抽選）における履修許可後の取消し・変更について18年度2学期以降の履修動向を見て再検討することになりました。

成績評価結果の「極端な片寄り」

報告事項1では，17年度1学期の成績評価における「極端な片寄り」についての問合せ結果，17年度

2学期の成績評価結果及び18年度1学期の成績評価の依頼について，成績評価・授業評価結果検討専門部会及び小委員会での検討状況が報告されました。

・17年度2学期の成績評価では，授業科目別のGPA値が最高3.70～最低1.09と大きな幅がある。
・「社会の認識」では，「秀」評価が少なく，授業科目全体のGPA値が1.98と低く，なかでもGPA値が1.86～1.19と特に低い科目が8科目ある。
・「英語I」では，「秀」評価を使わずGPA値が1.94～1.25と特に低い科目が14科目ある。
・「化学実験」では，「不可」26.5％，GPA値1.57の科目がある。
・成績評価の「極端な片寄り」については，外国語科目7科目，基礎科目6科目に関して担当教員に事情を問合せる。
・17年度2学期の成績評価結果(授業科目別，クラス別)を成績分布WEB公開システムで公表する。

http://educate.academic.hokudai.ac.jp/seiseki/GradeDistSerch.aspx

・18年度1学期の成績評価にあたっては，極端な片寄りのない適正な評価について配慮を依頼する。
・「極端な片寄り」については，①外国語科目では，履修者20名以上で「秀＋優」60％以上，「不可」15％以上の場合，②理系基礎科目では，「秀＋優」60％以上，「不可」20％以上の場合，③主題別科目(論文指導は除く)，総合科目及び文系基礎科目では，履修者100名以上で「秀＋優」60％以上の場合は「極端な片寄り」にあたる可能性もあること，今後はクラス別のGPAについても検討すること，「秀」評価の活用についても配慮願いたいことを付記する。

高大連携授業

報告事項2では，札幌旭丘高校と連携した高大連携授業の試行について，18年度2学期の実施要項が報告されました。本年度は旭丘高校以外の高校の参加も検討します。

報告事項3では，英語単位「優秀認定」の申請状況が報告されました。(TOEFL-ITP：92名，TOEFL-PBT：1名，TOEIC：11名，英検：3名，計107名)。

(小野寺彰　理学研究院教授・センター長補佐)

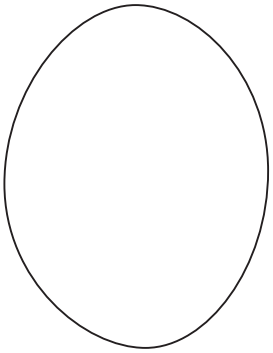
18年度新科目

新しい初習生物学講義
ゼロから学ぶ「基礎生物学」

理学研究院　助教授　栃内　新

平成16年度から獣医学部・水産学部・医学部保健学科で先行して開講されていた「基礎生物学Ⅰ・Ⅱ」が，18年度第1学期からは理学部と薬学部（「生物学Ⅰ・Ⅱ」）を除く全学の理系学生を対象に開講されています。同時に，これまで「生物学Ⅰ・Ⅱ」と並行して開講されていた，高校での生物未履修者に対するリメディアル講義（「生物学ⅠR・ⅡR」）は廃止され，「生物学Ⅰ・Ⅱ」は，高等学校での生物ⅡBまでの既修を前提に講義が行われています。

基礎生物学Ⅰ・Ⅱは，新しい教育指導要領に基づき内容が大幅に削減された中等教育を受けてきた学生が入学してくる「2006年問題」に対する対策として設計されたものですが，さらに踏み込んで高等学校で生物を履修しないで入学してきた学生が受講することも想定しています。つまり，大学入学前の最後の生物学習が中



学理科という学生にも対応した「ゼロから学ぶ生物学」です。

基礎生物学Ⅰ・Ⅱでは教科書として，欧米の大学において広く使われているRaven らによって書かれた定評のある「Biology（7th ed.)」を指定すると同時に，１年生には英語のままでは負担が重すぎるとの判断から，本学の理学部生物科学科・学科目教員を中心に全編を翻訳しました（「レーヴン・ジョンソン生物学」)。上巻はすでに培風館から出版されて基礎生物学Ⅰの教科書として使われていますが，519ページの大著です。ただ残念ながら，諸般の事情により下巻の出版が遅れて第２学期の基礎生物学Ⅱの講義に間に合わなかったので，本年度の基礎生物学Ⅱは英語教科書をもとにして，和訳教科書が入手可能な場合と同等の講義が行われています。

「レーヴン・ジョンソン生物学」は，現代生物学の全分野を広く深く扱っているため，基礎生物学で講義される初習者向けの講義内容だけでは飽き足らない意欲のある学生，および専門基礎として開講されている「生物学Ⅰ・Ⅱ」さらには，学部で行われる関連講義にも十分対応できるものですが，ふんだんに使われているカラーの図版により，わかりやすいだけではなく生物学を苦手とする初習の学生の興味を喚起することにも大きく貢献するものです。ただし，その厚さ(重さ)と値段が一般の大学教科書に比べると，(日本では)標準を越えていると考えられがちなのか，履修者のうちで購入している学生が少な目なのが残念です。教室での講義の背後にある広大な生物学の世界を知るために，学生諸君には是非とも購入してもらい，予習・復習・自学・自習に役立てることをお勧めしています。

基礎生物学Ⅰでは，地球上の生物すべてが共通の性質として持っている普遍性を学びます。具体的には,「生命の起源」,「細胞の構造と機能」,「エネルギー代謝」,「生殖と遺伝」,「分子遺伝学」で，30数億年前に生まれた地球上におけるすべての生命の起源となる細胞が，今日の地球に存在するすべての生物に至るまで連綿と受け継がれてきた歴史に思いを馳せます。基礎生物学Ⅱでは，現在の地球上に存在する想像を絶するほど多様な生物の生き方，およびそれらが生じてきた進化について学びます。具体的には,「進化」,「生態と適応」,「生物の多様性」,「生物の形態と機能」,「生物体の調節」であり，基礎生物学Ⅰで学んだように共通する性質を維持しながらも多様な存在様式を持っている生物が，どのような進化過程の結果生じてきたのか，また現在どのように生きているのかを理解します。こうした生物の共通性と多様性を学ぶことで，地球上における生命の歴史と現在の生物の多様な生き方の全体像を把握することが，基礎生物学Ⅰ・Ⅱの目標です。

旧来の生物学講義に対してしばしば指摘されていた，教員によって講義内容が異なることや講義技術の差に由来する不均等感に対して，共通教科書を使うことで標準化を進めたことと，教科書に使われているあるいは同時発売されているCD-ROMやウェブサイトで提供されている図や写真・動画などを利用した視覚に訴えかける教材の利用は，学生にはおおむね好意的に受け入れられているようです。我々が16年度から「特色ある大学教育プログラム」の支援を受けながら試行している水産学部の学生に対する4クラス合併のパイロット講義には，主にその教室規模の大きさに由来する不満も多く聞かれますが，教科書を購入して予習・復習することと，双方向性を目指して改善を続けている講義に積極的に参加することで多くの不満は解消すると思っています。学生諸君の積極的な参加なしには，どんなに立派な講義も絵に描いた餅に終わってしまいます。大学入学後の１年間に，1000ページを越える生物学教科書を征服してみれば世界観も変わってくるはずです。教員およびTAと一緒に，生物学を楽しんでもらいたいと思っています。

英語 II オンライン授業・TOEFL-ITP 試験の報告

言語文化部　助教授　　土永　孝

はじめに

『センターニュース』No. 66 で中間報告をさせていただいた英語 II オンライン授業は，第 14 週の締切までに必須課題を完了できなかった学生に対する 8 月 11 日までの猶予期間を経て，8 月 19 日に 2,598 名分の成績入力が無事終了し，その全業務が完了しました。学期中は，教材に関するアンケートを毎週行い，学期末には授業全体に関する最終アンケートを行いました。手書きの回答の入力・集計を外注する費用も手間もかけずに頻繁にアンケート調査できるのがオンライン授業の強みですが，膨大な自由記述を含むデータの整理には時間がかかります。今，言語文化部英語教育系英語 CALL 実施委員会は，学生からの声と第 1 学期の実践を通して得られた経験をもとに，来年度に向けて，教材や授業運営方法を改善する作業を進めているところです。今回は，TOEFL-ITP のスコアと英語 II の成績の分布を中心に，簡単な報告をいたします。

英語 II 受講者の TOEFL-ITP スコア分布

6 月 17 日実施の TOEFL-ITP および 20 日実施の同追試験のスコア分布を以下に示します。履修登録者 2,598 名中 2,583 名が受験。最低点 327，最高点 660，平均点 462.2，標準偏差 35.7 でした。なお，試験問題冊子の落丁乱丁のため 7 月に再受験した 1 名はこのデータに含まれていません。

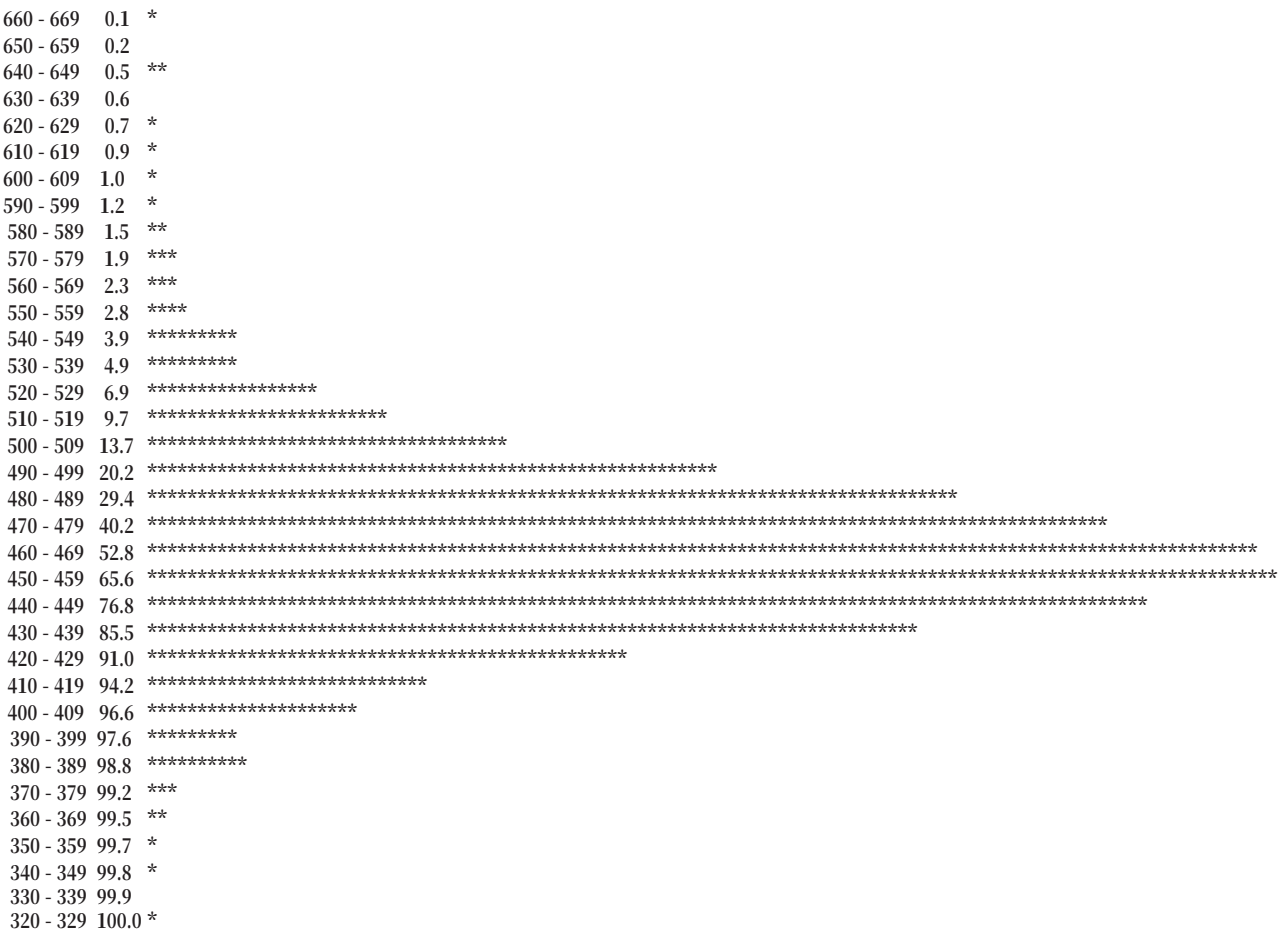


図 1．TOEFL-ITP のスコア分布

数値は左から「スコア範囲」「累積百分率」。その右の＊は学生 3 名を表す。ただし右端の＊は 1 ～ 3 名のいずれか。

英語 II の成績分布

英語 II の成績は，TOEFL-ITP のスコアによる全学部統一基準で評価されます。カッコ内は該当学生数。

秀：	530 以上	(98 名)
優：	475-529	(720 名)
良：	430-474	(1406 名)
可：	400-429	(287 名)
再試験対象：	400 未満	(87 名)

ただし，オンライン教材配信サーバ WebTube 上の必須課題，グループ学習課題の完了状況によっては，可以上に該当するスコアであっても不可になったり，可が上限となるという条件が定められています。スコアが 400 未満の学生には，オンライン英語教材 NetAcademy から出題される再試験を課し，それでも合格しなかった場合に不可としました。再試験対象者は 73 名で，うち 58 名が可，15 名が不可となりました。TOEFL-ITP のスコアと上記の条件を総合して評価を行った結果，成績分布はグラフのようになりました。学部・学科間の違いはかなりありますが，全体で見れば，妥当な成績分布と言えるでしょう。GPA 平均は 2.14 でした。

来年度に向けて

今は改善策を検討している最中なので，ここでは委員会で話題となっている案をいくつか挙げるにとどめます。

(1) 課題の取組方や締切に関する指示・連絡方法の改善

英語 II ではオンラインで指示・連絡を行いますが，毎週オンライン掲示を見る習慣がつかない学生もいます。全学教育掲示板や CALL 教室のドアにも掲示を行い，時間割通りに教室に来ている学生には TA・教員が注意を促すなど，二重三重の手段を講じましたが，それでも課題提出ミスを犯したり締切を忘れる学生がいました。旧来の掲示や，学生便覧など紙メディアの連絡さえ見ない学生がいるのだから仕方ないことだと言ってもいられません。よりわかりやすいオンライン連絡システムを工夫する一方で，不注意な学生を少しでも減らすために，時間割通りに CALL 教室に来れば指示を受けられることをもっと宣伝すべきでしょう。

図 2. 英語 II の成績分布

(2) TA の増員

第 3 ～ 12 週は，2 つの CALL 教室を 1 名の TA が行き来して担当する計画でしたが，蓋を開けてみるとそれは現実的ではありませんでした。また，学生が TA のいる教室までわざわざ足を運んで質問することはほぼ皆無でした。そのため，教員も教室に出向くこととなり，教材作成，課題評価作業にかけるはずの時間が奪われることがありました。(1) で述べた指示・連絡方法を改善するためにも，来年度は 1 教室に TA 1 名がつくように要求を出しているところです。

(3) さらなる良質な教材の作成

NetAcademy を学習させ学生の質問に対応するというのが最初期の構想でしたが，よい学習体験を提供するためにはそれでは不十分と考えた委員会は，結局，NetAcademy に準拠した 19 の教材を作るほかに，23 の独自教材を作って提供しました。（詳しくは http://ecall.ilcs.hokudai.ac.jp/heo/e2_2006/schedule.html を参照してください。）半数近くをオプション教材に指定したとはいえ，オンライン授業でなければ，これだけ多様で豊富な教材を学習させることは難しかったでしょう。学生の反応をアンケートで見た限りでは，古くて制約の多い NetAcademy に依存しない独自教材にさらに力を入れるべきであろうと感じています。言語文化部の英語母語話者教員による 20 分超の講義のスライドと音声を動画化したものは，最も評判のよかった教材の一つでした。技術・資源その他の面で克服すべき問題をひとつひとつ乗り越えながら，オンライン授業ならではの良質な教材を作成し，提供し続ける必要があります。

注）本稿の執筆にあたり他の英語 CALL 実施委員（河合靖・河合剛・上田雅信・野坂政司）の協力を得ました。文責は筆者が負っています。

新生「化学実験」

「自然科学実験 (化学)」企画責任者　地球環境科学研究院　教授　　嶋津　克明

平成 18 年度の新カリキュラムに合わせて，化学実験（正式には自然科学実験（化学））ではほとんどすべてのテーマを更新しました。これは実験科目の位置付けが専門基礎科目からコアカリキュラムに変更になったこと，ならびに物理，生物あるいは地学と融合した総合型実験の導入を求められたことに対応するためです。旧テーマはすでに十年以上にわたって実施してきており，カリキュラムの変更がなくてもテーマを大幅に変更する時期と考えていたので，良いタイミングでテーマの見直しができたと思っています。

今回の変更においては，学生の科学への興味を培うような，また環境やナノなど現代の社会的話題に関連したテーマの導入に心掛けました。実験テーマは，①酸化還元滴定による COD（化学的酸素要求量）の測定，②吸収スペクトルと酸塩基平衡，③タンパク質分解酵素の反応速度解析，④ものさしで測る分子の大きさと表面圧–気液界面の単分子膜–，⑤身近な医薬品の合成，⑥天然のかおり物質の合成，の 6 つです。これらの実験を通して，化学実験の楽しさを体験できるものと思っています。

また，実験がコアカリキュラムと位置付けられても，化学の正確な知識や正しい実験操作技術を早いうちに修得することは，理系の学生にとってたいへん重要なことですので，この点を配慮した実験操作の組み立てとテキストの記述を行いました。

もう一つの重要な変更は環境についての配慮です。化学実験ではこれまで受講者が多いこともあって，化学薬品の排出量が多く，また合成実験中の室内環境もあまり良好ではありませんでした。新実験では化学薬品の扱う量を少なくし，合成実験はすべてドラフト中で行うなどの改善を行いました。

受講者数は，今年度よりほぼすべての学部が自然科学実験を必修に指定したため，4 学科全体では大幅に増加しましたが，化学の場合はもともと多かったため従来とほぼ同数の 1,300 名強となっています。学生の受講態度は，私の印象では従来に比べてきわめて良く，4 学科全体で定めたルールを徹底したせいか遅刻する学生もほとんどいませんでした。

1 学期終了後にとったアンケートによると，63% の学生が化学実験に熱心に取り組んでおり，熱心ではなかった学生は，あまり熱心でないものも含めて 4% 以下でした。また，有機合成実験に興味を持った学生が多い反面，物理化学系の実験については関心が低く，内容も難しいと感じた学生が多くいました。レポート作成に費やした時間は 3 ～ 5 時間が最も多く，負担に感じている学生も少なからずいたようです。教員や TA の指導については，適切が 77% であり，自由記述欄に熱心な指導であったと書いた学生も相当数いました。内容や説明がわかりづらいと指摘された点についてはすでに修正し，10 月から始まった 2 期の実験から実施しています。

実施体制についても大きな変更がありました。まず各学科の実験が独立の科目でなくなったため，4 学科全体で出席，レポート，成績などについて統一的な方針を定めることになりました。学科間の調整は考え方やこれまでの運営方法が異なるため困難な部分もありましたが，結果としてコミュニケーションが密にとれるようになりました。これは理系基礎教育を行う上での大きな成果です。

化学についても大きな動きがありました。平成 17 年の秋に，私の知る少なくとも過去 30 年ではじめて常勤の技術職員の採用が認められ，実験を円滑に実施する体制が整いました。また，理学部化学と地球環境の教員が密接に協力してテーマ設定や実験の運営を行う体制となりました。テーマについては工学部や薬学部の先生の意見も取り入れています。

現在，新化学実験は順調に進行していますが，これは多くの教員，技術職員，事務職員のご協力のもとではじめて出来たものと感謝しています。今後も，

テーマのみならず運営についても出来るだけ開かれた化学実験にしたいと考えており，全学の皆様の忌憚なきご意見を心より歓迎します。

センター　CENTER

TA の現状に関するアンケート調査の速報

本年７月下旬に全学教育の TA と TA を使用している教員にアンケートを実施しました。７月末現在のデータのうち主に TA に対するアンケートについて速報します。詳しいレポートは教員へのアンケート結果と合わせて本年度末発行の高等教育ジャーナルに記載する予定です。

一人で複数の授業の TA をしている院生や，複数の授業を担当している教員もいるので担当授業の数だけアンケートを依頼しました。TA の人数は 451 名，回収率は全体で 40% です。教員へのアンケート回収率は TA より高く 50% を超えています。

表１　回収率

対象	アンケート数	人数	回収数	回収率
TA	430	307	156	36%
教員	152	144	77	53%
計	582	451	233	40%

TA の平均的イメージは，平均年齢　26 歳，最高 42 歳，最低 22 歳，平均月収８万７千円。男子が 114 名，女子が 41 名 (36%) で女子の比率は院生全体における女子の比率 (24%) より高いです。担当科目は表２のとおりで専門基礎科目が 60% で一番多くなりました。

表２　担当科目の種類

一般教育科目	20%
外国語	20%
専門基礎	60%

実際にどんな仕事をしているかを見ると「学生の質問に答える」「実験・実習の準備」「実験・実習の際に学生への指導」の順に多く，ほぼ半数の TA は出席記録をとっています。少数ですが（教員に代わって）講義をしている（したことがある）TA もいます。

表３　TA の実際の仕事（複数回答）

学生の質問に答える	77%
実験・実習の準備	69%
実験・実習の際に学生への指導	67%
出席の記録をとる	49%
採点・評価	42%
学生に講義する	28%

担当の教員から詳しい指導を受けた TA は 40%，指導を受けていない TA は少ないようです。

表４　指導

詳しい指導を受けた	40%
簡単な指導を受けた	55%
指導は受けなかった	5%

TA が学生とうまく接することができたか，TA をしていて楽しかったか，自分が人に教える仕事に向いているかどうかといった意識や感想は TA がよい授業支援を行うためには必須の事柄です。「学生とうまく接することができなかった」「楽しくなかった」「やりがいを感じなかった」「学生を教える仕事に向いていない」といった「問題 TA」の比率はおおむね 10 ～ 30% 程度。ほとんどあ TA として合格といえます。今後，やりたくない院生には TA の仕事をさせないようにしたり，楽しく学生を教えることができるような研修を工夫する必要があります。

表５　学生とうまく接することができたか

学生とうまく接することができた	81%
学生とうまく接することができなかった	8%
学生と接する仕事ではなかった	11%

表６　TA をして楽しかったか

楽しかった	85%
楽しくなかった	15%

表７　TA をしてやりがいを感じたか

やりがいを感じた	73%
やりがいを感じなかった	27%

表８　TA に向いているか

自分は学生を教える仕事に向いている	74%
自分は学生を教える仕事に向いていない	26%

結論

一般的に大半の TA は基礎的な指導を担当教員から受け，仕事を楽しんで行っているといえます（ただしこの調査は当人の主観的を聞いているので客観的に見て良い指導をしているかどうかはわかりません）。自由記述を見ると教員も院生も TA に否定的な意見は１，２つしかありませんでした。院生の中には TA 体験を大変高く評価している人もいます。教員の意見にも TA なしの授業はできない，TA には大変世話になったというものもありました。総じて TA は院生にも教員にも肯定的に受け取られています。謝金の額が少ないことや，従来教員が一人で行ってきた授業を TA を活用できるような形に作り変えることなどは大学や教員の側の今後の課題です。また，大学院生も博士課程高学年になると，他大学で非常勤講師を務めることもあり専門家として十分な能力を持っているので，授業改善のためには TA の職務と待遇の見直しも必要でしょう。

高等教育　HIGHER EDUCATION

客員教授に清華大学史教授が着任

Shi Jinghuan（史静●）教授は，清華大学教育研究所の Executive Director であるとともに，北京女性教授協会の会長も務めています。同教授の専門は，高等教育政策，教育の国際比較とその歴史などです。現在，知識ベース社会における研究大学の再編，特に教育学習モデルの変遷に焦点をおいて研究しています。

史教授は，過去にフルブライト教授としてメリーランド大学に赴任しており，高等教育研究において幅広い分野の研究を行ってきました。最近の論文は広島大学高等教育研究開発センターから出版された “University and the Institutional Innovation in Post Graduate Education: Case Study of the Formation of a NewMaster Degree of Engineering in China” です。

史教授は８月初旬にセンターに赴任されており，11 月初旬まで滞在します。この間に，講演会（10 月 31 日午後４時半から情報教育館において）やゼミなどを開催する予定ですので，ご参加くださるようお願いいたします。

第９回北海道大学教育ワークショップ

第９回北海道大学教育ワークショップが，11 月 10 日（金），11 日（土）に奈井江町農業構造改善センター（ないえ温泉ホテル北乃湯）で，表９に示したプログラムのように行われます。

この教育ワークショップは，ミニレクチャーと小グループ討論，討論内容の発表を一組にしたセッションを何回か行うという形式で，全学 FD の中心的な研修会です。1998 年 10 月に真駒内ハイツ北海道青少年会館で，各部局から 37 名，他大学から２名に，当時の丹保憲仁総長，阿部和厚高等教育開発研究部長など世話係を合わせて総勢 46 名で，第１回目が行われました。以後この最適規模で毎年１回 11 月に行われ，今回で第９回目になります。

新学習指導要領で学んだ新入生を迎えた現在，大学の教育現場において，学生に知的刺激を与え，自主性を引き出し，自学自習の態度・習慣を身につけさせることが強く求められています。今回のこの研修会においては，若手教員および指導的立場にある教員を対象として，北大で現在の課題であるとみなされている「単位の実質化」に重点をおいて，教育の基礎を理解し，新しい教育手法を身につけることをめざすという目標を掲げています。

表９．第９回北海道大学教育ワークショップのプログラム

11 月 10 日（金）

8:30	北大事務局前集合　（事務局大会議室で受付）
9:00	挨拶「FD 実施にあたって」（中村総長） 事務局大会議室
9:25	記念写真撮影
9:30	バス　出発　　研修開始：オリエンテーション
10:40	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着
10:45	ミニレクチャー「FD の目的と意義」
11:15	ミニレク「GPA と単位の上限設定について」
12:00	昼食
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング
13:30	ミニレク「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」
14:00	グループ作業 I の課題の説明
14:10	グループ作業 I「授業の設計１：科目名・目標の設定 」
15:10	発表・全体討論
16:00	休憩
16:20	ミニレクチャー「教育方略」「 学生参加型授業の例」（30 分）
16:50	グループ作業 II の課題の説明
17:00	グループ作業 II「授業の設計２：（目標の手直しと）方略」
18:00	発表・全体討論
18:50	夕食
19:30	休憩（風呂など）
20:20	講演「アカデミック・ハラスメントについて」（大畑昇歯学研究科教授）
21:00	懇親会

11 月 11 日（土）

7:30	朝食
8:30	ミニレクチャー「評価」
9:00	グループ作業 III の課題の説明・
9:10	グループ作業 III「授業の設計３：（方略の手直しと）評価」
10:10	発表・全体討論
11:00	休憩
11:10	参加者の個人的感想や意見
12:00	昼食
13:00	バス出発
14:30	北大学術交流会館前到着

生涯学習　LIFELONG LEARNING

生涯学習計画研究部主催公開講座「生涯学習計画セミナー」開催される

8月19日に生涯学習計画研究部主催の専門型の公開講座「生涯学習計画セミナー」が開催されました。

今年度のテーマは自治体の財政危機，市町村合併，指定管理者制度の本格的導入などのもとで「生涯学習・社会教育の＜危機＞にどう立ち向かうか」ということでした。

町井輝久生涯学習計画研究部長の挨拶のあと，木村純生涯学習計画研究部教授による「北海道における生涯学習・社会教育の動向と課題」についての講義のあとに，内田和浩北海道教育大学生涯学習教育研究センター教授が「市町村合併と社会教育職員に求められる役割」，谷川松芳浅井学園大学助教授が「長沼町の社会教育主事としての実践を振り返って」をテーマにそれぞれ講義を行いました。

受講者は，札幌市教育委員会，恵庭市教育委員会，苫小牧市教育委員会，円山動物園ボランティア，北海道開拓の村ボランティア，札幌市生涯学習センターボランティア「ちえぼら」など14名で，他大学の教員などのアドバイザーや大学院生を含め40名の参加があり，熱心な討論と交流がおこなわれました。

例年，翌日には「生涯学習計画セミナー」の受講者を中心にして「生涯学習実践セミナー」を教育学研究科社会教育研究室と共催で実施しています。生涯学習の実践についてじっくり議論して互いに学び合うことを目的にするものですが，今年度は「生涯学習実践の把握とその記録・分析の意義」をテーマに，宮崎隆志教育学研究科教授が「社会教育実践をどうとらえるか」，財団法人札幌市青少年女性活動協会の松田考札幌市中央勤労青少年ホーム・レッツ中央・主任指導員が「札幌市勤労青少年ホーム・レッツにおける青年の地域交流の実践から」を報告しました。この報告をもとに30名ほどの参加者で討論を行いました。

特別講義「大学と社会」はじまる

本年度の全学教育特別講義「大学と社会」が10月から金曜日5講時にはじまりました。この講義は1998年度から当時の高等教育機能開発総合センター長，中村睦男現総長の発案で始まったもので，実社会で活躍する卒業生を講師に招き，講師の方々に自らの職業や専門分野，仕事の面白さややりがいなどとともに，大学時代にどんなことを身につければよいかについても話していただきます。

本年度はノンフィクション作家賞を受賞した梯久美子様など11人の方々にお話しいただきます。履修上限科目設定やGPA等新しい履修方法がはじまって，受講状況が心配されましたが，本年度も昨年とほぼ同じ500名近い受講者がありました。本年度は次ページのような卒業生の方々にご協力いただき講義が行われます。とくに最終日に行われる受講生自身によるライフプラン発表会は学生達の進路観や職業観，大学生活への姿勢などを知る良い機会になっています。関心のある教職員の方はご参加下さい。

この講義についての問い合わせは，下記まで御連絡下さい。

（内線）5306　　町井　輝久
tmachii@high.hokudai.ac.jp

表 10. 特別講義「大学と社会」予定

日程	テーマと講師 (敬称略)
10/ 6	講義ガイダンス
10/13	「会計の世界は面白い」 石川　信行（いしかわ　のぶゆき) ＜公認会計士・税理士　北海道大学会計専門職大学院実務科　教授：教育学部卒＞
10/20	「刑事弁護における「社会資源」の」活用～「大学」の効果的な利用法について」 山口　達哉 (やまぐち　たつや) ＜弁護士：法学部卒＞
10/27	「人間にとって病気とは何か」 方波見　康雄（かたばみ　やすお） ＜医療法人社団　慈佑会　方波見医院医師：医学部卒＞
11/10	「フリーランサーという働き方」–「個」に徹し「社会」」で生きる– 梯　久美子 (かけはし　くみこ) ＜ノンフィクション作家：文学部卒＞
11/17	「フロンティア精神と企業社会」 –北大生への期待–（仮題） 横山　清（よこやま　きよし) ＜株式会社アークス・株式会社ラルズ　代表取締役社長：水産学部卒＞
11/24	「私の自治体経営論」 中島　興世（なかじま　こうせい) ＜恵庭市長：法学部卒＞
12/ 1	「新しい価値を創造する」–ビール新商品開発の現場より– 太田　雄人 (おおた　たけひと) ＜麒麟麦酒株式会社　商品開発研究所　中味開発チームリーダー：農学部卒＞
12/15	「グローバル社会とサイエンスの最先端に挑戦する人材とは？」（仮題） 樋口　達夫（ひぐち　たつお) ＜大塚製薬株式会社　代表取締役社長：水産学部卒＞
12/22	「求む！成長する教員」（仮題） 井上　晴雄（いのうえ　はるお) ＜北海道千歳高等学校　校長：教育学部卒＞
1/12	「北国の鉄道と街づくり」 菅野　光洋（かんの　みつひろ) ＜北海道旅客鉄道　株式会社総合企画本部副本部長　新幹線計画室室長：工学部卒＞
1/26	ライフプラン発表会

平成１８年度全学インターンシップ実績

生涯学習計画研究部では、キャリアセンターと共同で、全学インターンシップは平成 16 年度より全学教育科目として実施していますが、今年度についても夏季休暇を中心に実施しました。学部・研究科（学院)、学年別の参加者数は表のとおりですが、昨年度とほぼ同様の 85 名が参加しました。今後は、本インターンシップの成果をより高めるため、参加者のレポート作成、成果発表会の開催を行う予定です。

表 11. 平成 18 年度全学インターンシップ実績

公開講座「トレーニングマシンと手具を活用した健康づくり手法」開催される

去る9月17日（日）、生涯学習計画研究部が主催し、健康づくり関連の資格を有する指導者を対象にして、本学スポーツトレーニングセンターに於いて、「トレーニングマシンと手具を活用した健康づくり手法」のテーマでスポーツ公開講座が実施されました。講座プログラムは午前10時から町井輝久生涯学習計画研究部部長による開講の挨拶に始まり、川初清典生涯学習計画研究部教授による「新しいウォーキング手法」、水野真佐夫教育学研究科教授による「虚弱者・高齢者の運動とサプリメント」が講義され、午後には外部3名の講師によりマシンの専門的使用法が指導されました。

参加者は理学療法士、作業療法士、健康運動指導士、健康運動実践指導者、保健士、看護士、栄養士、管理栄養士、介護福祉士など63名であり、受講修了書が授与されました。

入学者選抜　ADMISSION SYSTEMS

形態を変えた「北大セミナー in とかち」の成果と課題

これまでの北大セミナーは，土・日・祝日の半日を使い各地域の主要な高等学校を会場に実施してきました。しかし，「北大セミナー in とかち」の会場を提供している帯広柏葉高等学校からは，この形態は，(1) 高等学校側の準備にかかる負担が大きい，(2) 学校行事や部活動との日程調整が難しい，などの改善点が挙げられていました。そこで今年度は７月，８月，９月の３回に分けて実施することにしました。

講師として，表 12 のような十勝に縁のある先生方を募り，広く十勝市民に関心をもってもらいたいと考えました。地元の有力紙である十勝毎日新聞社の協力により，開催案内や当日の模様などを記事にしていただきました。また，十勝管内の校長会や教頭会，PTA 会などでも参加を呼びかけていただきました。

表 12.「北大セミナー in とかち」の日程

３回を通じての参加者数は，全体講演が延べ約 60 名，講義（９回）が延べ約 150 名，進路相談会が延べ約 30 名でした。参加者の約９割は帯広柏葉高校の生徒であり，他校の生徒や一般市民，高校教員を併せて残りの１割でした。参加者数は３回を通じて例年並みです。

今後の課題としては，(1) 日時，(2) 会場，(3) 内容，(4) 広報の四つがあります。まず日時ですが，やはり土曜日や日曜日は部活や模擬テストなどのため，参加しづらい高校生が多いようです。平日の放課後が望ましいというのが高校側の考えです。次に会場ですが，帯広市内の他の高校の進路指導部に伺ったところ，他校の生徒は参加しづらいとのことです。駅前の一般会場を借りることも検討課題です。内容については，今の高校生は十勝にちなんだ内容にあまり興味を持っていないというのが，帯広柏葉高校の進路指導部の見解です。国際性や授業との関係が見える内容が望ましいという意見でした。最後に広報ですが，広報する時期が遅いということが課題です。実施する前年度には日程を確定し，地域の高校の行事予定に組み込んでもらうといった働きかけが必要だと感じます。保護者や市民への広報手段は今後検討を重ねる必要があります。

このような課題がある中，参加した生徒からは以下

のような意見が寄せられました。

・工学と環境がこれほど関係していたことに驚いた
・大学での教育や研究の様子がわかり興味が沸いた
・研究には様々なテーマがあり，研究の仕方が異なることが分かった
・実際の卒業論文を見ることができ大学での研究をイメージできた
・大学に入ってからも多様な進路があることがわかった
・大学と地域との密接な関係に気づくことができた
・なかなか聞くことのできない内容であり興味深かった
・獣医にもいろいろな進路があることがわかった
・新しい夢が増えた
・自分のやりたいと思っていることができると感じた
・福沢諭吉について今までの自分は知らなすぎた

一方，講師をされた先生方からも，聴講していた高校生の意識や向学心の高さを褒める声が寄せられました。また高校教員との懇談会では，ゆとり教育による初等中等教育の歪みや大学入試のあり方について活発な議論がされました。

高校生と大学との接点としてだけではなく，教育に悩む高校教員や保護者との接点になることが，北大セミナーの使命として課されていると思います。

図 3. 全体講演の参加者の感想

図 4. 講義の参加者の感想

高校生の全学教育科目の聴講はじまる

「高大連携科目についての研究会」（入学者選抜研究部・生涯学習研究部）の今年度の研究活動の一環として、高校生による2006年度第２学期の全学教育科目の試行的聴講が始まりました。この試みは今年度で三回目となり、今回は複数の高等学校の参加にともなう実施面の課題に注目しながら、本学における高大連携科目の効果的な在り方と制度化の可能性について検討することになりました。札幌旭丘高校に加え、４校（札幌北、札幌開成、藤女子、立命館慶祥）が新たに参加し、計58名の高校生（3年生１名、２年生31名、１年生26名）が32科目（総合科目８科目、主題別科目９科目、一般教育演習15科目）を聴講しています（表13参照）。生徒たちは、本学の授業に対して大きな期待を持っており、「北大生になったつもり」で意欲的に授業を聴講しています。

授業開始に先立ち、9月29日と10月4日にオリエンテーションを実施しました（授業日程の関係で学校別に実施）。高校生はまず情報教育館４階多目的共用教室（２）で全学教育科目の概要と授業聴講の留意点などについて説明を受け、その後高等教育機能開発総合センター及び周辺施設を歩いて授業の行なわれる教室を確認しました。附属図書館北分館では聴講する科目の参考図書の場所を中心に館内ツアーを体験しました。

今年度は全学教育科目のカリキュラムや履修条件の改変にともなう新しい環境条件の中での試行となりました。難しい状況の中、高校生の聴講をお認め下さった先生方の多大なご配慮とご協力に感謝申し上げます。高等学校側の期待も大きく、生徒の学習支援や来学方法などについて各学校の状況に即した対応策が試みられています。高校生の試行聴講に対するご助言とご支援をお願いいたします。

写真１　北分館ツアーの様子

表 13.　試行聴講の科目名、担当教員、聴講者数

科目区分	講義題目	担当教員	（所属）	聴講者数
＜総合科目：環境と人間＞	湿原の科学	井上　京	（農学研究院）	1
同上	北大総合博物館で学ぼうヒグマ学入門	天野　哲也	（総合博物館）	2
同上	食料生産と環境保全	長谷川　周一	（農学研究院）	2
同上	寒冷圏の科学	隅田　明洋	（低温科学研究所）	4
同上	水の惑星の環境生態・環境浄化及び環境経済	田中　俊逸	（地球環境科学院）	1
＜総合科目：健康と社会＞	脳科学　分子から高次機能発現まで	浦野　明央	（理学研究院）	1
同上	なぜ病気になるのか？ –治療医学から予防医学へー	武藏　学	（医学研究科）	2
＜総合科目：人間と文化＞	世界の教育と文化	池田　文人	（高機能センター）	2
＜主題別科目：思索と言語＞	社会哲学入門	高幣　秀知	（文学研究科）	1
＜主題別科目：歴史の視座＞	新自由主義と現代社会	水溜　真由美	（文学研究科）	6
＜主題別科目：芸術と文学＞	ギリシア文学入門	安西　眞	（文学研究科）	2
同上	中国怪物論	武田　雅哉	（文学研究科）	2
＜主題別科目：社会の認識＞	文化人類学的な世界の見方	●山　敬己	（文学研究科）	1
同上	人の移動の人文地理学	祖田　亮次	（文学研究科）	1
＜主題別科目：科学・技術の世界＞	人間を操るもの–報酬と罰の心理学–	和田　博美	（文学研究科）	4
同上	地球惑星科学のフロンティア	池田　隆司	（理学研究院）	2
同上	科学・技術と人間の倫理 「生物と生命の倫理」	栃内　新	（理学研究院）	1
＜一般教育演習＞	身近な寄生虫	奥　祐三郎	（獣医学研究科）	1
同上	ナショナリズム論	中島　岳志	（法学研究科）	1
同上	数理的思考とコンピュータ –コンピュータは電気羊の夢を見るか–	工藤　峰一	（情報科学研究科）	1
	脳と行動：生物学的理解とその限界	高畑　雅一	（理学研究院）	1
同上	パッチアダムス研究–現代医療が失ったもの–	前沢　政次	（医学研究科）	2
同上	生命分子化学	坂口　和靖	（理学研究院）	2
同上	生殖医学（女性医学）概論	櫻木　範明	（医学研究科）	2
同上	建築と都市	羽山　広文	（工学研究科）	2
同上	生物資源のかしこい利用	齋藤　裕	（農学研究院）	2
同上	不平等の社会学	平澤　和司	（文学研究科）	2
同上	異文化コミュニケーション学への招待	李　明玉	（言語文化部）	2
同上	学校づくりと教師の仕事 …教師になりたい人のゼミナール	町井　輝久	（高機能センター）	2
同上	モノづくり実習：アンプを作ってみよう	小野寺　彰	（理学研究院）	1
同上	素粒子論入門	石川　健三	（理学研究院）	1
同上	近未来の情報通信	小川　恭孝	（情報科学研究科）	1
計	32(科目)	32(名)		58(名)

センター日誌　CENTER EVENTS, *May- June*

7月

2日 ・（説明会）外国人学生のための進学説明会（東京）
3日～３１日・（行事）北海道大学公開講座（計８回）
5日 ・（訪問）三重県立桑名高校
6日 ・（会議）初習外国語Ⅲ取扱い検討会議
・（訪問）鹿児島育英館高校
7日 ・（訪問）札幌北高校（PTA）
8日 ・（CVP）第３回市民向けキャンパスツアー
・（説明会）大学ガイダンス 2006in 東京
11日 ・（会議）第３回学生編成・学生募集単位検討ＷＧ
・（会議）「人文・社会科学の基礎」科目責任者会議
・（会議）第２回 OCW 連絡会
12日 ・（会議）第１回大学院共通授業在り方検討ＷＧ
・（会議）第１３回 GPA・上限設定・成績評価実施検討 WG
14日 ・平成 19 年度入学者選抜要項公表
15日 ・（行事）北大セミナー in とかち（第１回）
16日 ・（説明会）外国人学生のための進学説明会（大阪）
17日 ・（行事）北大セミナー in 旭川
18日 ・（会議）第９回学部・大学院教育検討 WG
19日 ・（説明会）北海道大学入試説明会（高等学校教諭対象）
20日 ・（会議）「外国語」関係科目責任者会議
・（会議）第 30 回高等教育開発研究委員会
21日 ・（会議）平成 18 年度第１回センター予算施設委員会
24日 ・（会議）「理系基礎科目」科目責任者会議
・（会議）第１回全学教育実施体制運用の在り方検討 WG
25日 ・（会議）平成 18 年度第４回教育改革室会議
・（会議）第４回学生編成・学生募集単位検討ＷＧ
・センターニュース第 66 号発行
26日 ・（行事）オープンユニバーシティ（函館キャンパス）
27日・28日・（行事）体験入学（函館キャンパス）
28日 ・（会議）平成 18 年度第３回センター運営委員会
30日 ・（行事）オープンユニバーシティ（札幌キャンパス）
・（行事）特色 GP「進化するコアカリキュラム」フォーラム
31日～８月２日　・（行事）体験入学（札幌キャンパス）

8月

1日 ・（会議）第 133 回全学教育委員会小委員会
8日 ・（会議）第 65 回全学教育委員会
・（訪問）名寄農業高校
9日 ・（説明会）進学セッション 2006（札幌）
16日 ・（説明会）主要大学説明会（福岡）
18日 ・（説明会）主要大学説明会（京都）
23日 ・（説明会）主要大学説明会（名古屋）
24日 ・（訪問）流通経済大附属柏高校
25日 ・（訪問）香川県藤井高校
26日 ・（行事）北大セミナー in とかち（第２回）
28日 ・（説明会）主要大学説明会（東京）
30日 ・（訪問）滋賀県水口東高校
31日 ・（会議）第 14 回 GPA・上限設定・成績評価実施検討 WG
・（訪問）呉青山高校
・（訪問）倉敷古城池高校

9月

5日 ・（会議）第 28 回共通授業検討専門委員会
・（訪問）京都府南陽高校
6日 ・（会議）初習外国語Ⅲ取扱い検討会議
・（訪問）和歌山県新宮高校
7日 ・（訪問）函館東高校
8日 ・（会議）第 10 回学部・大学院教育検討ＷＧ
・（説明会）釧路湖陵高校学校説明会（釧路）
・（訪問）京都府南陽高校
11日 ・（会議）オープンユニバーシティ・体験入学担当教員連絡会
13日 ・（会議）平成 18 年度第５回教育改革室会議
・（会議）科目責任者全体会議
・（会議）「外国語」科目責任者会議
・（会議）第 33 回教務情報システム専門委員会
14日 ・（会議）第 134 回全学教育委員会小委員会
15日 ・（訪問）札幌旭丘高校
16日 ・（行事）北大セミナー in とかち（第３回）
24日 ・（訪問）滋賀県膳所高校
25日 ・（訪問）札幌東陵高校
27日 ・（会議）第 41 回教務委員会
29日 ・（講演）ＧＰＡ・上限設定の講演会
・（訪問）函館ラ・サール高校
・（訪問）遺愛女子高校
30日 ・（説明会）函館中部高校学校説明会（函館）

行事予定　SCHEDULE, *June - October*

	【日（曜日）】	【行事】	【備考】
10月	2(月)	第２学期授業開始	
	11(水)～12(木)	１年次履修届受付	
	11(水)～12(木)	２年次以上履修届受付	当該学部
	12(木)	追加認定試験成績締切	
11月			
12月	25(月)～1月4(木)	冬季休業日	
1月	5(金)	授業再開	
	20(土)～21(日)	大学入試センター試験	【19(金)休講】
	23(火)～24(水)及び	補講日	
	30(火)～31(水)		
	31(水)	第２学期業終了	

e-Learning システム HuWeb 利用者募集中

2002 年 10 月から運用を開始しました HuWeb は，利用科目数が 90 科目を超え 120 余名の教員が利用するようになりました。学生の登録者数はのべ 3000 名を数えるようになりました。2004 年からは留学生のための英語版 HuWeb も稼働しています。

一週間に一回しか顔を合わせることができなかったクラスの学生や教師が，このシステムを利用することで，いつでも連絡を取ることができるようになります。HuWeb は５つの機能を備えたコミュニケーション・ツールで，学生と教師の情報交換の場を，教室内だけではなく教科別のホームページへと拡げます。それぞれの科目のホームページでは，図と文字で構成される任意の形態のホームページ，学生が書き込める掲示板（ミーティングルーム），学生全員に一度に送れるメーリングシステム，任意のホームページへのリンク，任意のフォーマットのデータをやりとりできるアップロード・ダウンロードシステムを独自に利用できます。

学期途中でも登録できます。ご利用ご希望の方は，以下の連絡先までメールをお送り下さい。

申込先

高等教育機能開発総合センター　細川 敏幸
e-mail : thoso@high.hokudai.ac.jp

図 5. HuWeb のトップページ

センターニュース　2006, No. 67　目次

巻頭言　安藤　厚 …… 1

全学教育委員会報告（第 64 回 ,65 回）…… 3

18 年度新科目
新しい初習者生物学講義　ゼロから学ぶ
「基礎生物学」　栃内　新 …… 6

英語 II オンライン授業・TOEFL-ITP
試験の報告　土永　孝 …… 8

新生「化学実験」　嶋津　克明 …… 10

TA の現状に関するアンケート調査の速報 …… 11

客員教授に清華大学史教授が着任 …… 12

第 9 回北海道大学教育ワークショップ …… 13

生涯学習計画研究部主催公開講座「生涯学習計画セミナー」が開催される …… 14

特別講義「大学と社会」はじまる …… 14

平成１８年度全学インターンシップ実績 …… 16

公開講座「トレーニングマシンと手具を活用した健康づくり手法」開催される …… 17

形態を変えた「北大セミナー in とかち」の成果と課題 …… 18

高校生の全学教育科目の聴講はじまる …… 20

センター日誌 …… 22

行事予定 …… 23

目次・編集後記 …… 24

「高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 -」原稿募集

高等教育開発機能総合センターでは，毎年 1 回「高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 -」を発行しています。本誌は, 広く高等教育に関する論議を高め, 知識・情報を共有するための発表の場として活用され，これまでに 14 号まで出版されています。投稿資格は特に問いません。投稿規定は本誌の巻末か，高等教育開発研究部のホームページをご参照ください。原稿の締切は 1 月末日です。

編集後記

真空管集めに奔走している。テレフンケン，ゴールドライオン，ムラード etc、青春時代の往年の名菅を求めて，時代遅れの週末の楽しみは続く。

しかし，そのニセモノの多さには閉口する。例えば，菅の構造は一緒なのにプリントされているブランド名が異なる等はざらなのだ。

名菅は響きがまったく違う。その音の中に感動があるのだ。様々な教育に関する報道が多い今こそ，ホンモノとの接触が求められているのである。　（うさぎ）

センターニュース　第 67 号
（北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌）

発 行 日：2006 年 10 月 25 日
発 行 元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854

編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・木村 純・町井輝久
安藤 厚・川初清典・山岸みどり・鈴木 誠
池田文人・亀野 淳

ご意見，お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521
インターネット ホームページ：
http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center